

地域における災害に向けた予防的心理ケアの取り組み 第2弾

— 映画『「生きる」大川小学校 津波裁判を戦った人たち』から学ぶ —

古川綾子・櫻井未央（杏林大学 保健学部 臨床心理学科）

1. 活動の目的

我が国において、防災・減災のための備えは喫緊の課題である。2024年度は、地域への啓発活動及び予防的観点を持った学生の育成を目的として、臨床心理学科の学生とともに、中学生向けの冊作成し、三鷹市内の中学校などに配布した。

2025年度はその第2弾として、ドキュメンタリー映画『「生きる」大川小学校 津波裁判を戦った人たち』の上映会を実施することとした。東日本大震災において、宮城県石巻市の大川小学校は、全校児童の7割に相当する74人の児童と10人の教職員が津波にのまれ尊い命を失った。親たちは多数の犠牲者を出した事実や理由を知りたいと立ち上がり、最終的には石巻市と宮城県を被告に裁判にまで至った経過の記録である。



上映会の目的を以下の三つとした。

- ① 自然災害や危機的事態などの有事に、現場で適切な判断をできるリーダーシップの大切さとその難しさを再認識する。
- ② 平時より一人一人が当事者意識をもって防災や減災に取り組む必要性を自覚する。
- ③ 改めて「生きること」や、「命を守ること」の尊さや難しさを考える機会をもつ。

2. 活動の内容

【広報】

2025年11月から、2024年度に防災の冊子を配布した市内の中学に上映会の案内を郵送した。その他、地域交流課の支援によって、学内や地域に広く案内した。

【上映会】

日時：2026年2月9日（月）13時30分～16時
場所：井の頭キャンパス F309教室
運営補助：臨床心理学科学生 9名
参加者：41名

（地域の方16名、在学生18名、杏林大学職員7名）
*地域からは、MITAKAみんの防災、羽村市生涯学習推進課、三鷹市の中学教員の方などのご参加もあった。
*学生は、臨床心理学科の他に、看護学科、健康福祉学科、観光交流文化学科などからのご参加もあった。



【視聴後アンケート】

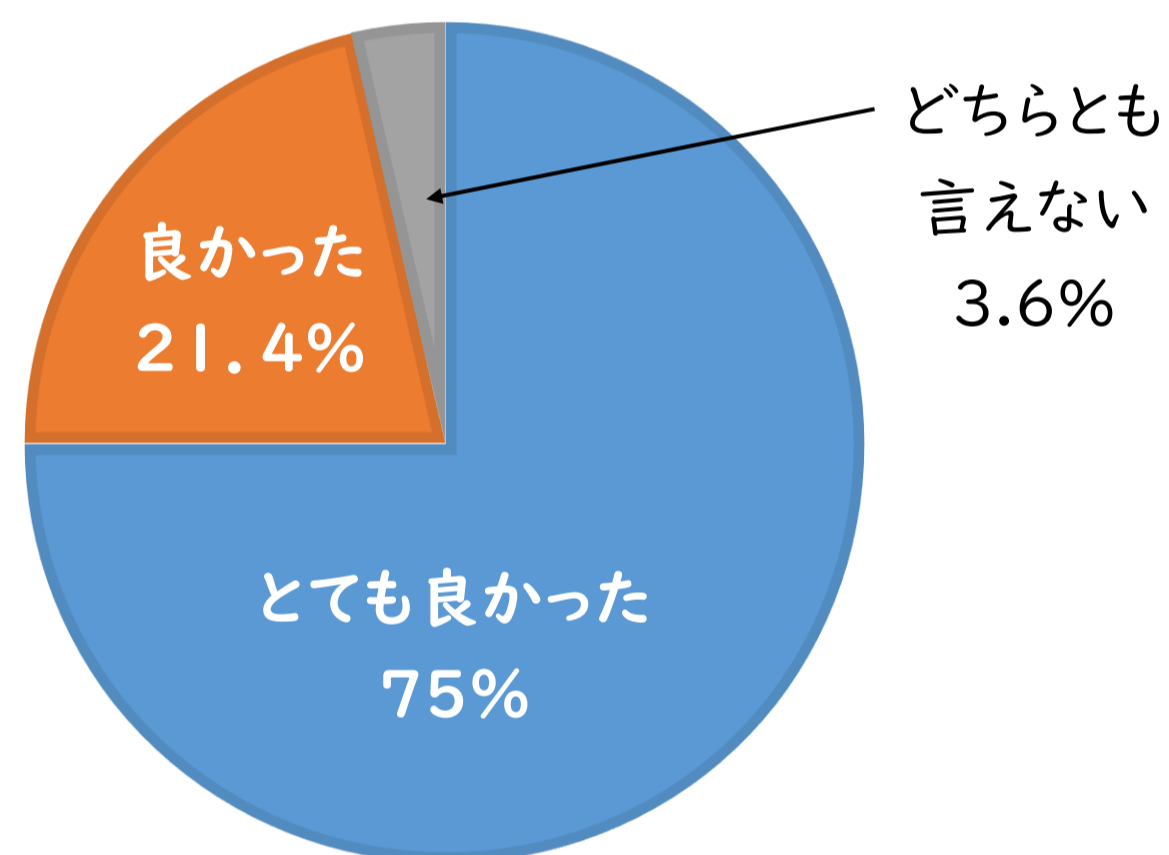
回収率は28名（68.3%）で、回答者の世代別内訳は、大学生11名（39.3%）、40代3名（10.7%）、50代4名（14.3%）、60代以上10名（35.7%）であった。
*30代から50代の回答者が少なかったのは、開催時間を平日の午後であったため、仕事をしている方の参加が難しかった可能性が推察された。



3. 今年度の成果（アンケート結果より）

(1) <視聴した満足度>について

「とても良かった」21名（75.0%）、「良かった」6名（21.4%）、「どちらとも言えない」1名（3.6%）であり、アンケートに回答者の視聴満足度は高かった。



(3) <目的に関連した回答を自由記述から一部抜粋>

目的① 自然災害や危機的事態などの有事に、現場で適切な判断をできるリーダーシップの大切とその難しさを再認識する。

- 「この映画の中では様々な言葉のやり取りがあったと思いますが、どういう気持ちでこの言葉を発しているのだろうかと考えながら見てました。またその言葉を聞いた人がどのような気持ちになったのかにも注目しました。遺族たちがどのような言葉を求めているのか、どんな言葉に傷ついていたのか、言葉を扱うことに関して考えさせられました。」（大学生）
- 「防災、危機管理に限らず、状況に応じた適切な判断の難しさを考えさせられた映画でした。」（60代）

目的② 平時より一人一人が当事者意識をもって防災や減災に取り組む必要性を自覚する。

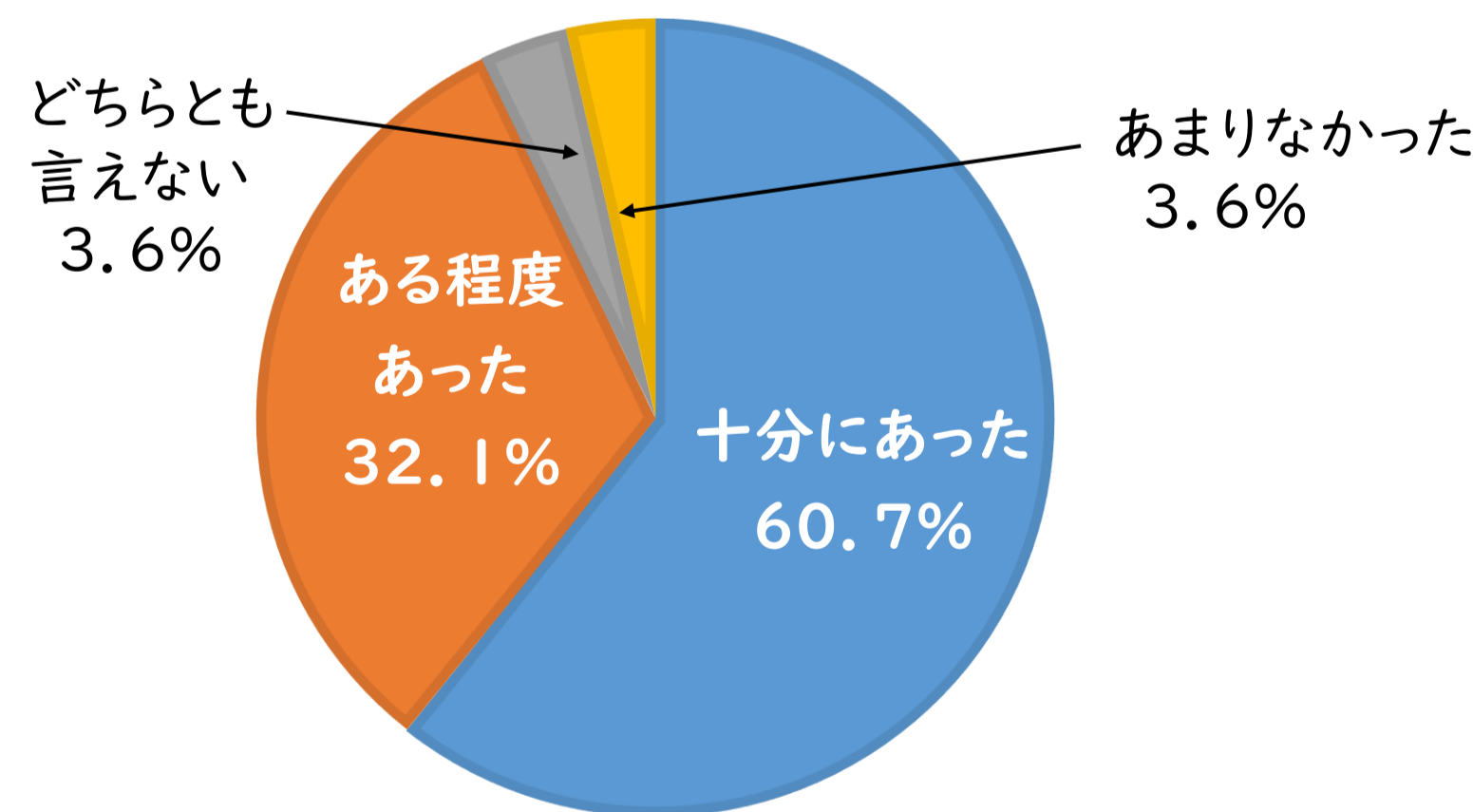
- 「数年後には守られる立場から守る立場になるので危機管理の意識をもたないといけないと思った。」（大学生）
- 「とにかく今の自分にできることを最大限にしていきたいという思いを強く抱きました。」（40代）
- 「他人事ではなく、自分はどうするか、何ができるかを考えていかねばとあらためて考えさせられました。」（60代）

目的③ 改めて「生きること」や、「命を守ること」の尊さや難しさを考える機会をもつ。

- 「自分の命は自分で守る、その先に人を守れる人になることが、生きている若者の使命なのかなと感じました。」（大学生）
- 「学校側に責任があるのは確かなのかもしれないけど、教職員の先生も亡くなっていて、その人たちに」
- 「も家族とか待っていた人がいたんだろうなと思いつつ、この映画を見ていました。」（大学生）
- 「映像には映っていない方、裁判には関わらなかった方、まだお子さんが見つからない方など、今回語られていない多くの人の想いを想像すると、この出来事を簡単に理解した気になってはいけません。」（40代）

(2) <視聴が今後の防災や危機管理対策の参考になることがあったか>について

「十分にあった」17名（60.7%）、「ある程度あった」9名（32.1%）、「どちらとも言えない」1名（3.6%）、「あまりなかった」1名（3.6%）であった。防災や危機管理対策としても参考になることがあるとする回答が大半であったものの、危機管理という意味では参考にならなかったという意見も少数ながらあった。



*以上のアンケート結果の他にも、有事に際しての現場での適切な判断の難しさや、当事者としての自覚、映画を視聴したことでの意識の変化など様々な意見や感想が多数寄せられ、上映会は三つの目的を深める契機となったものとする。

4. 課題と展望

【学生への教育的効果】

学生の感想からは、映画の中で交わされる言葉に着目し、言葉による侵襲や影響の大きさに改めて意識を向けているものや、映画で描かれなかった他の被災者の傷みにも思いを馳せているものなど、個々に様々な着眼点から視聴していた様子が見えられた。直接的には表現されない他者の立場や思いなどを理解するために必要な、想像力の醸成の機会としての教育的意義もあったように考える。

【今後について】

視聴が長時間に及ぶため、視聴後の意見交換の時間を確保出来なかったことで、個々の気づきを共有し、深める時間がなかったのは課題として残る。

三上（2013）は、市内の公立小・中学校全14校、約3000名が無事だった「釜石の軌跡」を達成した事実から、「知識を育む防災教育ではなく、自分の命を守るための「姿勢を育む防災教育」の大切さをあげている。更に、「平時の生ける知識・教養と想像力」と、「瞬時の的確な判断力と行動力」の大切さも指摘している。次世代を担っていく学生に、今後は「心理的安全性」や「リーダーシップ論」などを踏まえ、社会の課題に主体的に目を向け、柔軟に考え適切に判断できる姿勢を育めるような機会を提供していきたいと考える。

参考文献

A・C・エドモンドソン著・野津ら訳（2021）恐れのない組織 英治出版株式会社
池田美紀ら（2024）令和6年度能登半島地震災害における学校支援 一支援体制と災害ストレスへの対処。トラウマティック・ストレス。第22巻、2号
小井土雄一・石井美恵子編（2017）「多職種連携で支える災害医療 一身につけるべき知識・スキル・対応力」 医学書院
小井土雄一・石井美恵子編（2025）「災害支援における多職種連携 一保健・医療・福祉活動の総合調整をめざして」 医学書院
三上明彦（2013）<大川小学校の悲劇>と<釜石の軌跡>をどうとらえるかー現代に生きる学力と教養を問い直すためにー「人間と教育」No.77
三沢良ら（2022）職員室の心理的安全性-教師の協働を阻む対人関係リスクに関する検討-岡山大学大学院教育学研究科研究収録 第180号